

ホオズキ

牧 幸 男

9月、残暑の厳しい日もあるが、本格的な秋の深まりを感じる月でもある。植物にとっても少しずつ冬への準備が始まる頃だ。7月初旬頃から畑や路傍、庭に生育するホオズキの袋が紅色に変わりはじめ、緑と紅の美しい姿を楽しませてくれる。

夏の風物詩のひとつ、台東区浅草の浅草寺の「ほおずき市」（鬼灯市）は、文化初年頃（1804）芝愛宕神社の御神輿によって雷よけ祈願で始まったのだが、現在は浅草寺のみが有名になってしまった。言伝えでは、山東京伝（1761～1816）の『蜘蛛の糸巻』（1847）に、芝の青松寺の門前の武家屋敷に奉公する使用人が、愛宕権現の霊夢を見た翌朝、庭で一株の千成りほおずきを発見した。「6月24日の功德日にこの青ほおずきの実を愛宕の神前で鵜呑みにすれば、大人は癪の種（腹の立つ原因）を切り、子供は虫の気を封ずる」というお告げを耳にした。彼はこのお告げを吹聴したところ、不思議と効能があった。いつしか「御夢想の虫薬」と称して、青ほおずきの市が境内に立つようになった。6月24日が観音様の46,000日：127年（人間の理想の寿命*）の功德日であったことから、浅草でもほおずき市が始まり、愛宕より盛大になってしまった。

注*：一説には米の1升が米粒46,000粒あり、1升と1生をかけたともいわれる。また、46,000日は約127年に相当し、人の寿命の限界ともいえるため、「一生分の功德が得られる縁日」となった。現在の「ほおずき市」は、7月9日と10日は特別な縁日である。

しかし、現在この市で販売されるのは、**季節の関係**でホオズキはアメリカ原産のセンナリホオズキ（苦識）^{くしき}が殆どである。

ホオズキは、ナス科の一年草または多年草で、カガチ、ヌカヅキ、丹波ホオズキなど呼ばれている。東南アジアの温帯、暖帯にまれに自生があるが、通常は観賞用に植えられている。初夏に小さな白い花を咲かせ、後に球形の果実を結ぶ。同時に萼が大きくなり果実を包み、徐々に広卵形に生長する。やがて中空の風船に似た袋の中の実も赤くなり、ホオズキとなる。『新訂牧野新日本植物図鑑』に、ホオズキ、ヨウラクホオズキ *Pa.arlkengi*、センナリホオズキ *Pangulata*、ヤマホオズキ *P.chamaesarachoides*、アオホオズキ *Psavatieri*、イガホオズキ *P.japonica*、ハダカホオズキ *Tubocapsicum anomalum*、メジロホオズキ（珊瑚ホオズキ）*Solanum biflorum*が収載されている。



ホオズキの花



春のホオズキ

私の子供の頃、男子の遊びはビー玉、めんこ、こま、独楽回しなど、女子は御手玉、御弾き、おはじ、^{ほおずき}酸漿鳴らしなど区別がはっきりしていた。この酸漿鳴らしには、男子も挑戦することもあったが、「ぎゅう、ぎゅう」と上手に鳴らす子はあまりいなかった。『枕草子』（1000～3）第233段に「おほきにてよきもの家・・・^{ほおずき}酸漿。山吹の花。桜の花びら。」とあり、当時から大きなホオズキは鳴らすのに都合が良く、ほお

ずき鳴らしの遊びが行われていたようだ。古くからはおずき鳴らしが楽しまれていたことは、貝原益軒（1630～1714）の著『花譜』（1698）に「女兒其なかごをさりて、好んで口中にふくみ鳴らす。或いはふきあげて、たわむれんとす。」と記述が参考になる。平安時代から鳴し続けたこの遊びや、吹き上球遊び、袋を裂いて実を人形の顔にみたてる人形遊びなど、ついこの前まで見かけたが、最近その遊びを見ることは全くなくなった。

詩歌の対象になるのは明治以降が多い。

くさむらの 葉がくれなり 酸漿も 秋づく色に とどのひにけり
水打てば 青鬼灯の 袋にも したたりぬらむ たそがれにけり
人去り はおずき市の さびれ雨 石原八束
鬼灯の 一つの花の こぼれたる 富安風生

土屋文明

長塚節

植物名の由来は種々あり、先ず、『古事記』（681～712）に、素盞鳴尊が退治した八岐大蛇の目玉は赤か賀智のようだと記述があるが、カカガチはホオズキの事で、この頃から知られて呼び名である。平安時代まで奴加豆支、その後酸漿になっている。『大和本草』（1709）には、螫と言う臭虫（カメムシの一種か）が好んでこの葉を食べるからとある。牧野富太郎博士は、『大和本草』の植物名を採用している。

また、ほおずき鳴らしに少女が頬を突き出して吹く様子から頬突と言う説もある。他に、赤い果実から「ほほ」は「火々」で「つき」は染まるの説もある。漢名は酸漿、鬼灯、鬼燈等がある。酸漿の意は酸味があって水分が多いこと、「鬼灯」は、盆に先祖が帰ってくるとき目印となる提灯の代わりとして飾られたことが由来である。英語はChinese lantern plantである。

学名は、Physalis olkekengiで、属名はギリシア語のphysa（水泡、気泡）で膨らんだ萼の姿から、種小名はホオズキのアラビア語である。頬突の名前に由来するものとして、中国では、少女に絡む名が多く紅姑娘、紅子娘、姑娘花、花姑娘等がある。

薬用は、7～8月頃開花中に、根茎を含めた茎葉を日干しにしたものを生葉名「酸漿根」と呼び、咳止、解熱や利尿に用いる。江戸時代に、青ホオズキは解熱剤や婦人の胎熱に特効があると言われていた。

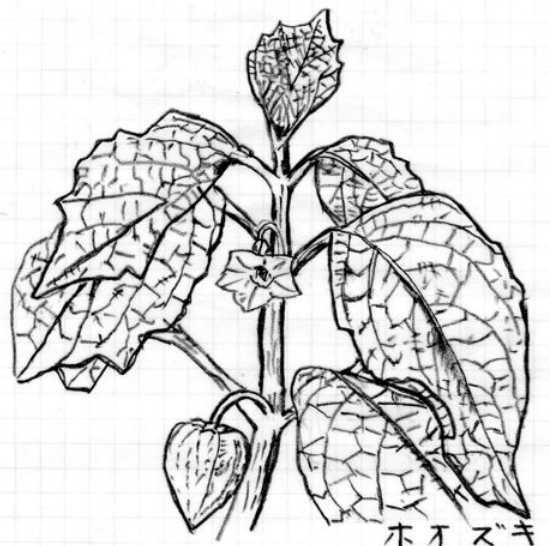
食用は、日本在来種は観賞用で、食用にしない。食用にするホウズキは、ショクヨウホウズキP. pruinosaで、北アメリカから熱帯アメリカ原産で、果実は生食のほかソースや砂糖漬け、ジャムなどに加工する。完熟すると糖度が15-16度にもなる。ヨーロッパでは古くから食用に栽培されている。

利用は、鉢植えやドライフラワーや観賞用に、果実はホオズキ人形にしたり、中身を取り除き、口に含み風船のように膨らませ音を出す子供の遊びに使っていた。

花言葉は「自然美」「偽り」「ごまかし」である。



秋のホオズキ



ホオズキ